

豊岡市におけるコウノトリ育むお米生産の現状と課題

食料・環境領域 主任研究官 田中 淳志

講演者 瀬崎晃久氏（豊岡市 コウノトリ共生部 農林水産課 環境農業推進係長）

菊地直樹氏（人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 研究部 准教授）

本田裕子氏（大正大学 人間学部 人間環境学科 専任講師）

日 時 平成26年5月22日（木） 14時～16時30分 場所 農林水産政策研究所セミナー室

去る5月22日（木）に、「豊岡市におけるコウノトリ育むお米生産の現状と課題」と題したセミナーが農林水産政策研究所で開催されました。

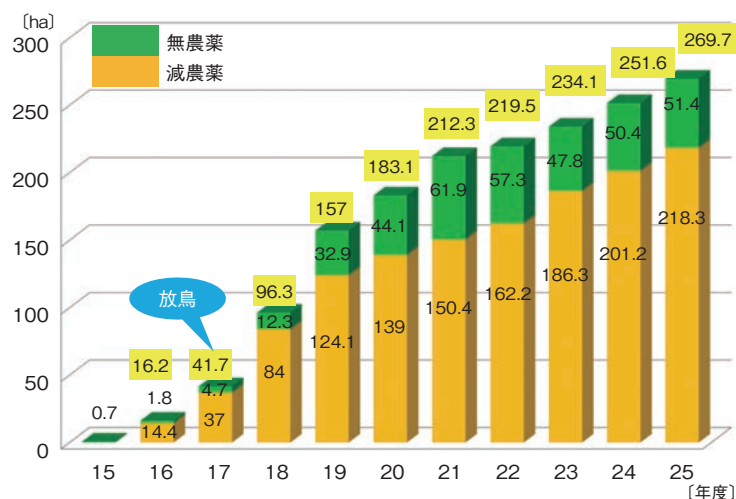
持続可能で安心・安全なわが国農林水産業の推進のためには、生物多様性の保全は重要な取組の一つです。これまで当研究所では、2010年4月にプレスリリースを行い、生物多様性に配慮した米生産の取組事例全般について整理し定性的分析を行うとともに、その代表的事例として兵庫県豊岡市におけるコウノトリ保全に配慮した米（「コウノトリ育むお米」以下では「育むお米」）について調査し、生物多様性保全に関する属性が高付加価値に結びついているのかを定量的に明らかにしました。

その後4年が経過しましたが、その間も生物多様性に配慮した米生産の取組の動向について問い合わせがあるなど、生物多様性に配慮した農産物生産の取組は、関係者にとって依然として高い関心事項となっています。

セミナーでは、改めて現在の育むお米の生産動向を豊岡市役所担当者からご報告頂いた上で、近年、豊岡市を事例に研究を行っている研究者お二人に最新の研究成果についてご報告いただき、意見交換を行いました。

まず「コウノトリ育むお米生産の現状と課題」とのタイトルで、豊岡市コウノトリ共生部の瀬崎晃久氏が、現状と課題を報告しました。兵庫県北部に位置する豊岡市は、日本海に面しており、日本で最後の野生コウノトリの生息地として知られ、戦後の高度経済成長が始まる以前には、人とコウノトリが圃場や河川などで一緒に見られました。高度経済成長が始まると、農業の重労働からの解放や生産性向上のため機械化が進み、圃場が整備・乾田化され、農業が大量に使われるようになりました。ま

た、コウノトリが巣を架ける木の伐採なども影響し、コウノトリの住める環境が悪化し、1960年代には野生のつがいを捕獲し人工飼育を開始しました。その後、コウノトリの野生復帰を目指し、自然豊かな環境で農業を推進する取り組みを進めてきました。そのため、農薬や化学肥料をなるべく使わず、たくさんの生きものを育むコウノトリ育む農法（以下では「育む農法」）が生まれました。この農法では、圃場に春の早い時期から水を張り、また肥料として有機物を施用することでイトミミズなどたくさんの生きものが湧いてきます。イトミミズは土壌中の有機物を食べ、その排泄物はとても柔らかな土を作り、この土と比較的深い水深とで、雑草を抑制し、除草剤の使用を減らすことができます。また、圃場から排水する時期を延ばすことで、オタマジャクシがカエルになる時間を与え、このカエルがカメムシなどの害虫を食べてくれます。豊岡市では、農協及び兵庫県と一体となってこの農法の普及に取り組んできた結果、育む農法の作付面積は耕地の6%程度まで増加しました。農家の労働量は増加しますが、農協では、育む農法で作ったお米を通常のお米



コウノトリ育む農法水稻作付面積の推移

より高く生産者から買取り、農家の収入が増えるようにしました。

一方この25年間で、豊岡市の農家は60%、農地は40%減少しました。農業をしたいという人が減っており、農業の営みを成立させ、農業で儲かる仕組みを作り出すには、高い値段でお米を売っていく必要がありました。しかし現実には厳しく、農協で買い取った育むお米を売り切れない状況でした。なぜ売れないのかを突き詰めていくと、安心・安全で、おいしいお米であることに加え、生物多様性という新たな価値を創出し、環境に貢献するお米であるということを経営者に理解してもらう必要があることがわかりました。そこで、お米の説明書を配布したり、販売店舗で豊岡の田んぼを再現したり、消費者が産地を訪問するキャンペーンを実施したりしました。その結果、最近では作付面積が伸びているにも関わらず、完売が続いています。また農家にとっては、労働量は増えますが、買い取り価格を時給換算すると、慣行農法よりも随分と高い価格で買い取れています。農家への調査では、育むお米に取り組みたくても取り組めないことも多く、そのような農家への対応も進めているということでした。

次に総合地球環境学研究所准教授の菊地直樹氏が「コウノトリの野生復帰を軸にした地域再生の可能性」と題した報告をしました。内容は、育む農法従事者への聞き取り調査結果と、放棄水田でコウノトリ生息環境を再生する取り組みについてでした。

育む農法を始めたきっかけでは、順に、人間関係、営農上の経済性・将来性などの利点、コウノトリのためと続き、特に人間関係が重要であることがわかりました。個人的な付き合いや行政・農協・普及センターの関係者との付き合い等、それまで築かれた人間関係から、この農法を始める人が多いことがわかりました。一方で、育む農法は手間がかかるため、兼業農家にとっては取り組みづらく、専業農家の割合が高いこともわかりました。また、無農薬栽培の育む農法で取り入れられている冬期湛水については、水の確保の難しさから、取り組みたくても取り組めないことが多いことがわかりました。

育む農法の問題点としては、水の管理・確保、技術的不安定さなどの営農技術を上げる声が多く、次に品質管理、その次には行政や農協への不満や慣行農法の生産者との人間関係などが挙げられました。

一方で、調査対象者全員が今後も育む農法を続けたいと回答しており、その理由として田んぼや環境

を良くしたい、行政や消費者との信頼関係維持や外部の人との交流を続けたい、付き合いでやめるわけには行かない、などの声が聞かれました。

次に日本海沿いの集落の耕作放棄水田での湿地造成の取り組みについて報告がありました。この地域の人々は半農半漁の生活をしており、獣害や少子高齢化、未圃場整備などで集落すべての水田が放棄されました。しかし、コウノトリが飛来したことがあり、餌場としての湿地の造成を、NPOやボランティアなども活用し、集落の日役で行っています。田んぼを湿地にするノウハウがないなかで、先祖代々受け継いだ各自の田んぼを、村全体の共有地と考え耕作放棄地にしない取り組みを行っていました。

最後に、大正大学専任講師の本田裕子氏による、『「コウノトリとの共生」がもたらす意識の変化』と題した報告がありました。

コウノトリの野生復帰事業について豊岡市民を対象にしたアンケート調査結果では、住民のコウノトリへの捉え方に放鳥後5年を経て変化が見られました。野生復帰事業が肯定的に捉えられていることには5年前と変化はなく、コウノトリを徐々に野生の鳥として見る傾向が見られる一方、コウノトリからもたらされる様々な便益への期待が強くなっていました。また、主にインターネットを経由して育むお米を購入した消費者へのアンケート調査では、お米を購入する際に約7割が安全性を最も重視しており、コウノトリが食の安全・安心の信頼性の指標になっていました。コウノトリ野生復帰事業そのものを知らない人が少なからず存在し、育む農法のそもそもの目的に関心が高いわけではないこともうかがえました。

これらの結果からは、育むお米は、「コウノトリのために」というよりも「自分の安全のため」に購入されていることがわかりました。また、コウノトリの野生復帰という目的はあまり認識されておらず、農家にとっては所得向上など、消費者にとっては安全な農産物という便益によって、農業とコウノトリとの共生がはかられていると思われました。便益をもたらす鳥としてみられがちなコウノトリが、普通の鳥として豊岡に定着すること、また、安全を求めて購入される育むお米が、コウノトリの野生復帰にとっても重要であるという認識のズレをなくすことが課題として挙げられました。